

研究ノート

雑談についての社会言語学的実証研究

村田 和代*

An Empirical Study on Small Talk from a Sociolinguistic Perspective

Kazuyo MURATA*

This paper outlines the research outcomes of “one-year basis individual research” (2014) funded by the Socio-cultural Research Institute of Ryukoku University. It reviews the previous research on small talk in Japan and abroad and reports the round-table conducted in July, 2014, consisting of 13 presentations and the discussion sessions including the audience, which was published as a book *The Kaleidoscope of Small Talk : A Linguistic Approach* (2016). The paper ends with concluding remarks including future research.

1. はじめに

従来コミュニケーションの主たる目的が情報伝達であると考えられてきたことも要因となって、情報伝達の質・量ともに劣るとされる雑談には、学術的にあまり注目が集まらなかった。1990年代以降、言語の対人関係機能面も重要視されるようになり、徐々に雑談について研究されるようになってきたが、学術的研究はまだ始まったばかりの萌芽期にある。また、国内において、近年、「雑談力」ということばが定着するくらい、社会的に雑談が注目されている。このような状況を鑑みても、実際の談話に基づいた実証的研究を進める意義がある。筆者は、すでに職場談話にみられる雑談について研究を進めてきたが、他の研究者とのネットワークを構築し雑談研究の体系化を進めるために、2014年度国際社会文化研究所の個人研究助成を受けて、「雑談についての社会言語学的実証研究」を行った。研究期間に下記の3つのプロジェクトに取り組んだ。

- ① 国内外の雑談についての先行研究・研究動向の調査
- ② 研究者間の交流や情報交換のための公開ラウンドテーブルの実施
- ③ 雑談談話の収録

本稿では、上記取り組みのうち①②の成果と今後の展望について報告する。以下、雑談の先行研究及び研究動向、ラウンドテーブルの報告、まとめと今後の展望の順で論を進めることとする。

* 龍谷大学政策学部教授

2. 雑談の先行研究・研究動向

雑談は、日常談話（non-institutional discourse）のみならず、制度的談話（institutional discourse）でもみられる。これを踏まえて国内・海外の雑談（small talk）についての研究動向を概観する。

2.1 国内の研究動向（日本語雑談の研究）

日本語の雑談は、様々な切り口で研究が進められている。まずは、雑談に現れる話題や構造に関する研究である。話題については、話題の開始、終了、転換のプロセスに見られる言語・非言語的特徴や、話題の推移の仕方、初対面状況で選択される話題の種類などについて論じられてきた（宇佐美・嶺田 1995、串田 1997、三牧 1999、河内 2009 など）。雑談の構造については、雑談の中の局所的な構造に焦点を当てた研究が多い。例えば、李（2000）は、友人同士の雑談の中で起こるナラティブを対象に、長い話を続けていくための言語行動について論じ、高井（2010）は、雑談における問題解決のやりとりを分析している。また、筒井（2012）は雑談を話題で区分し、話題ごとの内容の種類と、その話題を構成する連鎖組織の分析を行っている。

雑談をインタビューや討論といった他のタイプの会話と比較することによってその特徴を記述する研究も行われている（藤本ほか 2003、熊谷・木谷 2005 など）。これらの研究において、雑談は、話題の広さ、テンポの良さ、会話進行上の役割が固定していないといった点が特徴的であることが指摘されている。

日本語教育の分野では第二言語としての日本語による雑談研究も盛んである。たとえば樋口（1997）は、母語話者と非母語話者との初対面会話において、相手が母語話者かどうかによりいかに自己紹介の仕方が変わるかを分析している。また佐々木（1998）は、母語話者・非母語話者それぞれに対する、母語話者の雑談における情報要求発話の量についての分析を、また伊集院（2004）は、雑談のデータを用いて、相手が母語話者かどうかによっていかにスピーチスタイルが使い分けられているかについて分析を行っている。

以上概観した先行研究は、すべて非制度的談話にみられる（いわゆる「おしゃべり」に近い）雑談である。一般本では、むしろセールストークのような制度的談話（institutional discourse）にみられる雑談が重要視されているが、職場談話のような制度的談話の日本語雑談についての研究は、管見の限りにおいては、Yamada（1997 ほか）及び Murata（2015 ほか）だけであり、さらなる研究が望まれているという状況である。

2.2 海外の研究動向（small talk の研究動向）

Small talk の研究は、ことばの交感的使用（phatic communion）に初めて着目した Malinowski（1927）にさかのぼる。Malinowski（1927）は、その主要な目的を、沈黙を避けることによって対人的脅威を避けることとし、情報伝達という観点からは“aimless”であるとしてとらえていた。交感的使用の例として、あいさつ、天気の話、ゴシップ話等があげられており、以後 90 年代までは、このような定型タイプを中心に研究が進められた。日常談話にみられる small talk の構造やトピック、談話の中で現れる場所（e.g. opening, closing）について考察し、small talk を discourse type の一種としてとらえていた。

一方、90年代から、制度的談話、とりわけ職場談話（workplace discourse）の分野で small talk が着目されるようになってきた。職場談話の small talk の研究として、例えば、市場や店舗などのサービストーク中に生じる small talk とそれを支える規範意識についての研究が挙げられる（Lindenfeld 1990, Bailey 1997）。

2000年に、雑談についての言語学からの初めての体系的な研究書“Small Talk”が出版された（Coupland 2000）。本書の特徴として、それまで discourse type の一種として top-down でとらえてきた small talk を、まったく逆の視点から、つまり bottom-up で局所的にダイナミックに構築される相互行為としてとらえた点があげられる。談話の対人関係に関わる機能（phaticity）は、参加者同士によって相互的かつダイナミックに構築されるため、phatic talk（small talk）か non-phatic talk（transactional talk）かの二項対立ではなく、連続性があるものとしてとらえたのである。Coupland（2000）は、11編の論文からなり、職場談話にみられる small talk だけでなく、非制度的談話にみられるゴシップ等も含まれている。

Coupland（2000）以降は、ディスコースレベルで考察し対人関係に関わる機能が突出する talk（相互行為）を small talk ととらえるようになってきた点に着目したい。

3. ラウンドテーブル「雑談の美学を考える」

本ラウンドテーブルは、日常のさまざまな場面や関係性において、「雑談」的なやりとりに関連した研究を行う研究者が会して雑談の諸相について議論し、「雑談の美学」を探究することを目標とした（2014年7月19, 20日 龍谷大学深草キャンパスにて開催）。できるだけ多くの研究者に「雑談研究」に興味をもってもらえるようにすべて公開とし、オーディエンスもまじえたディスカッションの時間を設定した。

ラウンドテーブルでは、雑談の研究動向の紹介に続き、2日間で13件の報告が行われた。2日間のプログラムは下記の通りである。

7月19日（土）

司会進行 村田和代（龍谷大学）

13:00-13:20	イントロダクション 村田和代
13:20-13:50	村田和代（龍谷大学）「まちづくりの話し合いを支える雑談－コミュニケーションデザインへの応用－」
13:50-14:20	堀田秀吾（明治大学）「法コンテキストの雑談」
14:20-14:50	東 照二（ユタ大学）「『雑談的』スピーチと『非雑談的』スピーチ－小泉純一郎と尾崎行雄－」
休憩	
15:20-15:50	平本 毅（京都大学）「鮎屋のサービス文化と雑談」
15:50-16:20	坊農真弓（国立情報学研究所）「手話雑談におけるマルチアクティビティ－手を使って食べることと話すことの共起関係－」
休憩	
16:40-17:10	岡本能里子（東京国際大学）「雑談のビジュアルコミュニケーション－LINE 会話の分析を通して－」

7月20日（土）

司会進行 井出里咲子（筑波大学）

10:00-10:20	開始のあいさつ 村田和代
10:20-10:50	井出里咲子（筑波大学）「雑談が生じる場とその詩的機能」

10:50-11:20	村田和代（龍谷大学）「ビジネスミーティングの雑談－言語文化比較の観点から－」
11:20-11:50	山口征孝（クイーンズランド大学）「異文化間インタビュー談話の多機能的分析－Rapport（対人構築的）－report（情報伝達の）機能連続性仮説の検証－」
昼食	
13:20-13:50	菅原和孝（京都大学大学院）「南部アフリカ狩猟採集民グイのよもやま話」
13:50-14:20	白井宏美（慶應義塾大学）「雑談における『わかり合えないもどかしさ』に関する日独比較分析」
休憩	
14:40-15:10	大津友美（東京外国語大学）「日本語第二言語話者が参加する雑談の特徴」
15:10-15:40	片岡邦好（愛知大学）「雑談のジャンル性、非ジャンル性、間ジャンル性」
休憩	
16:00-17:00	まとめとディスカッション

以下、報告順に概要を紹介する。なお、本ラウンドテーブルをもとに、2016年2月に『雑談の美学－言語研究からの再考－』（村田和代・井出里咲子 編著、ひつじ書房）を出版した。各報告や議論の詳細については、そちらを参照されたい。

「まちづくりの話し合いを支える雑談－コミュニケーションデザインへの応用－」（村田和代）

本報告では、まちづくりの話し合いにみられる雑談を正談（話し合いの本題）と対比したものにとらえ、フィールドワーク、主催者・関係者へのインタビュー、実際の話し合い談話の録画・録音データから分析した。話し合いの本題に入る前のフェーズや、話し合いの途中の休憩のフェーズに焦点をあて、マクロ（話し合い全体のデザイン）とミクロ（話し合いで行われる相互行為）両方の視点から考察を行った。情報伝達や合意形成といった言語の情報伝達面が重視される話し合い談話においても、対人関係機能面を担う雑談は非常に重要な役割を担い、産官学民のセクターを超えた世代や価値観の異なるひとびとによって行われるまちづくりの話し合いは、雑談に支えられている点が明らかになった。

「法コンテキストの雑談」（堀田秀吾）

裁判という談話は、事件の判決を決定するという目的志向型であり、非常にフォーマルでコントロールされたプロセスであるために話題の脱線は起きにくいと考えられる。しかし、2009年に導入された裁判員裁判では、裁判結果に市民感覚を反映するために、一般市民であり、裁判という場に慣れていない裁判員達が発言しやすいように、「会話を利用して場の空気を生み出す」機能を持った雑談が時として利用されるようである。本報告では、実際の裁判官と市民が参加した模擬評議のデータをもとに、評議という法コンテキストにおける会話の特徴を明らかにし、裁判員達にできるだけたくさん発言してもらえよう「会話を利用して場の空気を生み出す」機能を持った雑談が用いられる有様が紹介された。

「『雑談的』スピーチと『非雑談的』スピーチ－小泉純一郎と尾崎行雄－」（東 照二）

時代を隔てた二人の政治家（尾崎行雄、小泉純一郎）の演説・講演の音源資料にもとづいて、「雑談的」か否かという観点から考察を行った。ここでいう「雑談」とは、会話、あるいは演説に

において、本来のアジェンダあるいはトピックではなく、それから逸脱したトピックについて、比較的短く、非計画的に語られるもので、話し手と聞き手の間での何らかの人間関係を構築（あるいは維持）するような効果をもたらすものだととらえた。尾崎の演説は、本来のトピックに沿って、脇道にそれることなく、理路整然と論点を積み重ねて行く「非雑談的」な手法である一方、小泉の演説は、本来のトピックに沿って論点を展開しながらも、随所に物語、それもかなり私的で詳細な描写をともなった物語を挿入するという「雑談的」な手法を用いていることが明らかとなった。

「鮎屋のサービス文化と雑談」（平本 毅）

江戸前鮎屋の飲食場面の会話分析から、鮎屋において中心的な活動（調理、顧客への品の説明等）と雑談がどう使い分けられているかを例証した。会話分析（conversation analysis）においては近年、複数の活動への従事（たとえば話しながら運転する）の方法をめぐる考察が活発になってきている。とりわけ診察（Maynard & Hudak 2008）、美容室での施術（Toerien & Kitzen 2007）などのサービス場面では、その場面における中心的な活動（診察なら診断を下すこと、美容室なら髪を洗うこと）と、サービス提供者と顧客との雑談とがどう使い分けられ、この使い分けによってどのような相互行為上の課題が解かれているかが議論的になっている。本報告では、親方や職人が調理や品の提供などの中心的な活動と、顧客との雑談とをどう使い分けしているか、その使い分けによって何を行っているかを分析した。分析を通じて、中心的な活動／雑談の使い分けによって常連でない客／常連客という客の区別が作り出されていることなどが明らかにされた。

「手話雑談におけるマルチアクティビティ手を使って食べることと話すことの共起関係―」（坊農 真弓）

近年、言語使用に関する行為と言語使用と関わらない行為とが同時に起きる現象を「マルチアクティビティ」（Haddington et al. 2014）と呼び、このような場面の相互行為分析が盛んになっている。本報告では、この立場をとり、たこ焼きを囲んだ4人の手話話者の手話雑談を研究対象とし、手話雑談中の「話す」「食べる」「作る」という3つの行為がどのように展開しているのかを考察した。手話雑談における「話す」「食べる」「作る」という行為はすべて手で行われるが、実際には、話しながら「食べる」といったように、2つ以上の行為が同時に進められているし、「対話型言語」とであると考えられる手話であるが、実際には見える範囲の複数人で会話が進行されていることがわかる。報告では、「会話の分裂」（Egbert 1997）の部分に焦点を定め、会話の空間的な分裂と融合の身体的な手続きについて論じられた。

「雑談のビジュアルコミュニケーション―LINE 会話の分析を通して―」（岡本能里子）

人々が日々交わす会話には、単に情報のやりとりだけではなく、場を共有し、会話を楽しむという要素がある。特に「若者ことば」の機能の1つである「楽しさ」や「のり」は、若者のコミュニケーションでは必須である。インターネットチャットから最近の SNS のやりとりでは、このような特に決まった目的のない「楽しさ」や「のり」を生み出す他愛ない言葉遊びやからかい合いなどが頻繁に見られる。本報告では、近年爆発的に浸透しつつあるマルチモードのコミュニケーションメディアである LINE チャットを取り上げ、視覚的に提示されるシークエンスを、「ビジュアルコ

コミュニケーション」としてラベル付けする。同一の統合構造や同じ種類の「スタンプ」を「参加の道具」（串田 2006）として互いに視覚的に利用し合い、「楽しさ」や「のり」が共話（水谷 1993）を通して共同構築されていく過程が実例をあげながら紹介された。

「雑談が生じる場とその詩的機能」（井出里咲子）

アメリカ社会におけるスモールトーク（small talk）とは、人々が日常気ままに交わすおしゃべりや雑談を総じて指すことばである。本報告では、雑談としてのスモールトークを「アメリカ社会の公的な場で見知らぬ人同士が交わすおしゃべり」として定義した上で、スモールトークの中に見られる遊びの機能について論じられた。公的場面でその場の参加者に笑いを生じさせるといった遊びとしてのスモールトークの性質を、車に貼られるバンパースティッカーとサービス機関での店員と客、客室乗務員と乗客とのやりとりを実例として紹介された。分析を通して、それぞれが相互行為の場に自己開示（self-disclosure）と平行体（parallelism）を用いた遊びを用いており、そうした遊びがやりとりの中に同調のリズムや響鳴を生み出す有様が明らかになった。さらに、2つの事例を通して、アメリカ社会のスモールトークが生じる公共の場において、基本的な前提とされる「身構え」（北村 1988）としての「雑談」とは何かが検討された。

「ビジネスミーティングの雑談一言語文化比較の観点から」（村田和代）

本報告では、ニュージーランド（NZ）および日本（JP）のビジネスミーティング開始前（pre-meeting）に焦点をあて、そこにみられる雑談のトピックや展開方法、その他の特徴について、実例をあげながら質的考察を行った。雑談の主要な目的として沈黙を解消することがあげられている（McCarthy 2000）。NZ データではこれに一致するが、JP データでは長い沈黙が多く、沈黙が必ずしもネガティブにとらえられているわけではなかった。雑談は参加者間の連帯（solidarity）を築く役割を担うが（Holmes & Stubbe 2003）、雑談を通じた連帯感の築き方（相互行為の展開の有様）が、NZ データと日本データでは異なっていることが明らかとなった。NZ データは、オーバーラップを伴いながら、参加者が次々とたたみかけるように協働して構築し、ユーモアを伴った快活なトーン（animated and high tone）で展開していた。一方、JP データでは、ポーズや沈黙が多く、ビジネス談話として想定されるようなトーンであった。

「異文化間インタビュー談話の多機能的分析－Rapport（対人構築的）－report（情報伝達の）機能連続性仮説の検証－」（山口征孝）

ニュージーランドで実施した調査インタビュー及びオーストラリアで行った日英バイリンガルのオーストラリア人と行った会話の中に現れたゴシップをデータとし、「雑談的」部分を同定し分析を行った。具体的には、「雑談的」部分と「非雑談的（正談）」部分を同定するため、構造面から「質問」と「応答」に焦点をあてて考察した。例えば、「捕鯨問題」を目的とするインタビューでは、インタビュアーが「謝罪」（“sorry for going back to the whaling issue”）した直後に行う「質問」（“how do you address the whaling issue in Japan?”）は活動タイプに制約された発話であるため、「謝罪」以前の対話部分を「雑談的」と同定した。結果、(1)「質問」は必ずしも情報伝達的な意味での「応答」を求めているのではなく、活動タイプの制約に従った「応答」が適切な反応である；

(2) 発話者間のラポールは雑談により深まることもあるが、対話者を排除・疎外する危険性を常に伴うことも認識すべきであるという点が明らかになった。

「南部アフリカ狩猟採集民グイのよもやま話」(菅原和孝)

本報告は、言語人類学のエスノメソドロジーによる日常会話の断片の考察である。南部アフリカ・ボツワナの中央カラハリ動物保護区内カデ定住地においてオーディオテープに収録した狩猟採集民グイ・ブッシュマンの日常会話の断片(約15分)を、会話の推移と組織化という切り口で分析した。一見「とりとめのない」話が続くようだがマイクロレベルで分析すると、同一命題を多人数で繰り返しながら展開したり、会話の中でひっきりなしに生じる偶発的な出来事が引き金となってトピックがダイナミックに推移してゆくことがわかる。事例の分析を通して、身体的な関わり合いとしての会話の本質やコミュニティのもつ背景知の複雑さ、社会史に深く根ざす暗黙の規範の存在について議論された。

「雑談における『わかり合えないもどかしさ』に関する日独比較分析」(白井宏美)

本報告は、チャット・コミュニケーションに、対面コミュニケーションの規範や行動様式がどのように表れているのかについて、日独比較の観点から実証を試みた。言語共同体にはそれぞれ、コミュニケーションに関する(多かれ少なかれ)特有の規則ないし慣習がある。一般的に、雑談参加者は、そのような規則を意識化することなく、それぞれの発話状況にふさわしい規則の適用を行っている。たとえば、日独間では「あいづち」をうつ箇所やタイミングが異なっていたり、一度に話す発話量に違いが見られたりする。対面の雑談におけるこのような発話様式の特徴は、チャット・コミュニケーションにおいても明らかに見られる。また、ドイツ語チャットでは二者間で雑談が進行している傾向が強いのに対して、日本語チャットではグループになって多者間で雑談が進む傾向が顕著である。事例の分析を通して「統合的協調」が本質的であるとされる日本語の雑談と「競合的協調」が本質的であるとされるドイツ語の雑談の特徴がチャット・コミュニケーションにも反映されている点が明らかになった。

「日本語第二言語話者が参加する雑談の特徴」(大津友美)

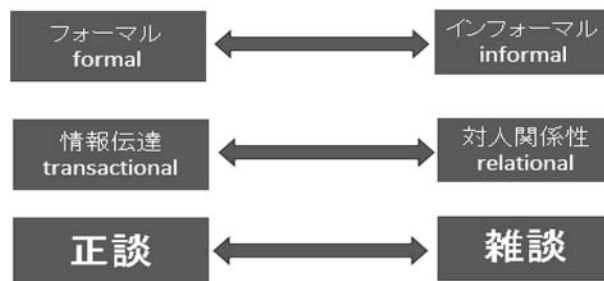
本報告が分析の対象とするのは、日本語を第一言語として話す者と第二言語として話す者との間で行なわれた友人同士のおしゃべりである。会話参加者の一方が第二言語話者で、文を作ったり、適当な語を選んだりすることにまだ困難がある場合、第一言語話者同士の場合とは異なり、相手の話が理解できず、会話進行が難しくなってしまう場合がある。また、第二言語話者の滞日期間などによっては、日本事情に関する知識が十分ではなく、話を通じないということが起こる可能性もある。そのような事態を避けるために、第一言語話者は相手が知らないかもしれないと予想される語があった場合などに、相手のその語に関する知識の有無を確認しながら会話を進めていくのだが、こういった場合には、対等な関係で、楽しくおしゃべりをしていた友人同士が非対称的な関係性に再編されてしまう。報告では、そのような非対称的な関係性が立ち現れることを避けながらも、第一言語話者がどのように相手の日本語や日本事情に関する知識の有無を確認し、友人同士の雑談を続けているかということについて事例をまじえながら考察した。

「雑談のジャンル性、非ジャンル性、間ジャンル性」(片岡邦好)

本報告では、多様な雑談的言語使用の中から「ゴシップ」に焦点を当て、親しい友人間で生じた幾つかの事例を中心に、その構築様式と社会的意義を検討した。ゴシップとは、現場に不在の他者に関する話であり、往々にしてその当人が語られたくないと感ずる特徴や行動について語られることが多い。語り手は自らの利害に直接関わらない他者の特徴、行動、状況、属性などに言及するが、往々にして批判的色彩を帯びるものである。日本語の語りのジャンルでは「噂話」「醜聞」「悪口」「陰口」などにあたり、おもに秘匿の趣を伴う。報告では、親しい友人間で交わされた比較的好意的なゴシップ(噂話)から、誹謗中傷や糾弾を含む陰悪なゴシップ(悪口／陰口)を検討することで、その発生から収束に至る機序を特定し、その対人的機能と社会的影響を考察した。また、ゴシップが悪意を伴って用いられる「いじめ」のような現象に対し、その問題解決の糸口を提供する可能性についても論じられた。

すべての報告が終了後、オーディエンスもまじえて(1) 雑談とは何か?(おしゃべりやトークとの異なり)、(2) 他文化の雑談に見る実践コミュニティごとの特徴とそれを超えた共通の特徴、(3) 雑談のもつコミュニケーション力としての機能、(4) ことばの交感的機能(phatic function)の再考・再評価といったトピックについて議論を行った。とりわけ、「何をもって雑談とみなすか」といった話題に興味が集まった。「雑談性」にはいくつかの指標が関わっている。以下の3つの指標はすべての報告に共通するのではないだろうか。

雑談をめぐる指標



まず、雑談は、会話の起きる状況のあらたまり度に関連する。雑談と言えば、家族や友人などの仲間内といった私的(private)でインフォーマルな場面を想像するだろう。制度的談話でみられる雑談も、フォーマルな中でもインフォーマルな色合いの強い場面(たとえば、会議が始まる前や休憩時間)で起こる可能性が高い。

続いて、Coupland(2000)ほか多くの先行研究で指摘されているのが、「目的遂行型(情報伝達型)」(transactional)との対比である。言うまでもなく雑談はこれとは対極にある「対人関係調整型」(relational)であろう。これに関連して、「雑談」の対極を「正談」と呼ぶことができるのではないだろうか。正談は、情報伝達や問題解決を中心としたタスク遂行のための会話であるが、雑談は対話の相手との関係性を構築、維持し、共感としてのラポール形成を行い、参与の場の空気を作ることを優先した会話である。正談の会話内容は雑談と比べてより叙述的であり会話の本題に沿っ

ていて目的も明確である。これに対し雑談は、いつの間にか自然発生し、時として正談からの脱線するようにして発生する。またタスク遂行が直接の目的ではないことから話の内容も特に定まっておらず、それゆえにいつでもやめる可能性を有する会話といえるだろう。雑談とそうでないものを識別する際には、以上のような指標が参考になるであろう。

4. まとめ

本稿では、2014 年度国際社会文化研究所の個人研究「雑談についての社会言語学的実証研究」での3つの取り組みのうち、雑談についての言語学を研究中心とした先行研究・研究動向及び公開ラウンドテーブルについて報告した。3つめの取り組みである雑談談話の収録については、助成期間中の春休み（2015 年 3 月）に、ニュージーランドで英語による友人間の雑談の収録を行った。これについては、本研究終了後の継続研究課題として類似の条件で日本語データを収録し、比較分析を行っている。

本稿でも論じたように、雑談をめぐる実証的言語研究は萌芽期にある。本研究が国内における今後の雑談の研究の活性化を促す契機となれば幸甚である。様々な雑談の状況とその特徴に注目し雑談のメカニズムの体系化を進めることができれば、多様なひとびとの共生や持続可能な社会形成にも寄与することができると考える。今後も引き続き研究を進めていきたい。

参考文献

- Bailey, B. (1997). Communication of respect in intercultural service encounters. *Language in Society* 26, 327-256.
- Cheepen, C. (1988). *The Predictability of Informal Conversation*. London: Pinter Publishers.
- Coupland, J. (ed.) (2000). *Small Talk*. London: Longman.
- Egbert, M. (1997). Schisming: the collaborative transformation from a single conversation to multiple conversations. *Research and Social Interaction* 30(1), 1-51.
- 藤本学・村山綾・大坊郁夫 (2003). 三者会話におけるトピックの変遷と会話の展開について－討論条件と親密条件における会話スタイルの違い－. 社会言語学会第 12 回大会発表論文集, 33-36.
- Haddington, P., Keisanen, T., Mondada, L. & Maurice, N. (eds.) (2014). *Multiactivity in Social Interaction: Beyond Multitasking*. John Benjamins Publishing Company.
- 樋口斉子 (1997). 初対面会話での話題の展開. 平成 7 年度～平成 8 年度文部科学省科学研究費 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書 日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作 (研究代表者: 西郡仁朗), 50-57.
- Holmes, J., & Stubbe, M. (2003). *Power and Politeness in the Workplace. A Sociolinguistic Analysis of Talk at Work*. London: Longman.
- 伊集院郁子 (2004). 母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け－母語場面と接触場面の相違－. 社会言語科学, 6(2), 2-26.
- 河内彩香 (2009). 日本語の雑談における話題の展開方法. 東京大学留学生センター教育研究論集, 15, 41-58.
- 北村光二 (1988). コミュニケーション論とは何か. 季刊人類学, 19(1), 40-49.
- 熊谷智子・木谷直之 (2005). 三者面接調査における雑談的行動－回答者同士の相互作用に着目して－. 社会言語学会第 16 回研究大会発表論文集, 62-65.
- 串田秀也 (1997). 会話のトピックはいかに作られていくか. 谷泰 (編) コミュニケーションの自然誌. 新曜社. pp.173-212.
- 串田秀也 (2006). 相互行為秩序と会話分析. 世界思想社
- Laver, J. (1975). Communicative functions of phatic communion. In *The Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, edited by Kendon, A. et al. The Hague: Mouton publishers, 215-238.
- 李麗燕 (2000). 日本語母語話者の雑談における「物語」の研究－会話管理の観点から－. くろしお出版

- Lindenfeld, J. (1990). *Speech and Sociability at French Urban Marketplaces*. Amsterdam : John Benjamins Publishing.
- Malinowski, B. (1927). (2nd edition) The problem of meaning in primitive languages. In *The Meaning of Meaning : A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*, edited by Ogden, K, & Richards, A. London : Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd. 296-336.
- Maynard W. & Hudak L. (2008). Small talk, high stakes : interactional disattentiveness in the context of prosocial doctor-patient interaction. *Language in Society*, 37(5), 661-88.
- McCarthy, M. (2000). Mutually captive audiences : small talk and the genre of close-contact service encounters. In *Small Talk*, edited by J. Coupland. London : Longman. 84-109.
- 三牧陽子 (1999). 初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー－大学生会話の分析－. 日本語教育, 103, 49-58.
- 水谷信子 (1993). 「共話」から「対話」へ. 日本語学, 12(4), 4-10.
- Murata, K. (2015). *Relational Practice in Meeting Discourse in New Zealand and Japan*. Tokyo : Hituzi Shobo.
- 村田和代・井出里咲子 (2016). 雑談の美学：言語研究からの再考. ひつじ書房.
- 佐々木由美 (1998). 初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話－同文化内および異文化間コミュニケーションの場面－. 異文化間教育 12, 110-127.
- Schneider, K. P. (1988). *Small Talk : Analysing Phatic Discourse*. Marburg : Hitzeroth.
- 高井美穂 (2010). 日本語の雑談における問題解決－報告の聞き手が開始する場合－. 日本語・日本文化研究, 20, 23-36.
- Toerien, M., & Kitzinger, C. (2007). Emotional labour in action : Navigating multiple involvements in the beauty salon. *Sociology*, 41(4), 645-662.
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析. くろしお出版.
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995). 対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン－初対面二者間の会話分析より－. 日本語学・日本語教育論集, 2, 131-145.
- Yamada, H. (1997). *Different Games, Different Rules : Why Americans and Japanese Misunderstand Each Other*. New York. Oxford University Press.